

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当: 斎藤登美夫

◆◆◆ No.0618 ◆◆◆

21/01/13

【 2021 年の為替見通し、「ドル中立」から「やや強気」の予想 】

2021 年相場がはじまって 2 週間近く。ドル/円相場は一時 102.60 円まで下落し、短期的に形成していたレンジを下回ったものの、結局底割れは「ダマシ」に。それもあってか、月間の変動幅はまだ 2 円にも満たない小動きだ。

さて、そうした状況下、今回の当レターでは新春恒例である「年間変動率」を参考にしたドル/円相場の今年一年の見通しについて、報じてみたい。果たして、年間を通していったいどういった値動きが予想されるのだろうか。

◎予想レンジは「97—113 円」、「米大統領選の翌年は大相場」のジンクスに期待も

当レターでは過去に幾度となくレポートしている「年間変動率」だが、改めて最初に簡単な説明を試みたい。過去 1 年間の相場変動をデータ化したもので、ドル/円の平均変動はおおよそ 16%になる。さて、そんな状況下、今年の為替市場の寄り付き価格は筆者が参考に行っているデータでは 103.10 円であった。これを基準価格とし、今年も平均で先に挙げた 16%の価格変動が予想されることになるわけだ。

そして、今年のオープンレート 103.10 円に平均変動率である 16%を単純に掛け合わせてみると、仮に一年を通して一本調子のドル高が進行した場合の高値メドはおおよそ 119.60 円で、逆に一本調子にドル安が進んだとすれば安値は 86.60 円となる。

— 上記したものは通常のオーソドックスな分析になるが、ここからが過去にもレポートしているオリジナルな「斎藤流」の年間変動率だ。いま一步踏み込んでさらに詳細な見通しを考えてみたい。

過去の変動率のデータを、最初に(1)「ドル強気相場」と(2)「ドル最強相場」、(3)「ドル弱気相場」と(4)「ドル最弱相場」、(5)「中立相場」— という 5 段階に分類してみる。紙幅の関係もあり、上記 5 例の算出方法や詳細な分類については省くけれども、それからすると(1)の「ドル強気相場」の年は年初寄り付きを基準に平均でドル高方向におおよそ 12%、ドル安方向に同じく 5%ほど動くことが判っている。同様に以下で、(2)から(5)について算出した過去の平均変動幅をもとに、今年ドル/円相場のドル高値と安値を予想してみた。以下がそれになる。(基準レートは 103.10 円を使用)

- (1); 「ドル強気相場」; ドル高方向に 12%、ドル安方向に 5% — ドル高値 115.47 円、ドル安値 97.95 円
- (2); 「ドル最強相場」; ドル高方向に 16%、ドル安方向に 1% — ドル高値 119.60 円、ドル安値 102.07 円
- (3); 「ドル弱気相場」; ドル高方向に 5%、ドル安方向に 11% — ドル高値 108.26 円、ドル安値 91.76 円
- (4); 「ドル最弱相場」; ドル高方向に 2%、ドル安方向に 15% — ドル高値 105.16 円、ドル安値 87.64 円
- (5); 「ドル中立相場」; ドル高方向に 8%、ドル安方向に 8% — ドル高値 111.35 円、ドル安値 94.85 円

一方、年明け以降の実勢相場を見てみると、年明けから数日はドル安・円高が進行。テクニカル面からもドル安方向への展望が開けたとの見方が広がったが、それは結局「ダマシ」に。その後はむしろ逆方向、ドル高・円安へと振れている。

そのため、なかなか今後の動静は読み難い面もあるのだが、一般的なエコノミストなどの見方はというと、今年一年を通して「ドル安・円高」を見込む向きが多いのではなかろうか。ちなみに、その理由としては、スタンスがハッキリと示されたわけではないものの、今年 20 日に誕生するバイデン新米政権の政策が「ドル高志向」ではなく、「ドル安志向(ではないか)」と予想されることを挙げる向きが多い。とするなら、変動率の観点からすると、ドル/円はヒョットとして年内に 100 円を割り込み 90-95 円といったレベルへと到達する展開があっても不思議はないようだ。

そんな「プロ」の予想を取り上げたあとに、筆者個人の相場観を開陳することは気が引けるのだが、一応コッソリ指摘しておく、メインは(5)の「ドル中立」見通し。そしてサブは(1)の「ドル強気」見通し— を考えている。それを踏まえ、若干の修正を加えた年間予想レンジは「97-113」円としたい。

なお、これまでの当レターで何度もレポートしたように、ドル/円相場は過去 4 年いずれもかなりの小動き。

先で「ドル/円の年間変動率は平均 16%」と指摘したが、これは変動相場制以降すべての「平均」で、前述した過去 4 年だけに限れば、たったの「年間 9%強」しか動いていない計算だ。それからすると、変動相場制移行の年間変動率 16%を使用した予想に、もしかしたら疑問を抱く向きがいるかもしれない。「レンジが広すぎるだろう」と。

しかし、調べてみると、同じ「年間変動率」でも、過去の「米大統領選の翌年」だけを今度は抜きだしてみると、実に 20.5%へと上昇していた。16%という平均変動を下回ったケースは前回 2017 年だけで、あとは軒並み平均以上の動意をたどっている。よって、半ば期待も込めて 5 年ぶりの大変動、「97-113 円」という年間 16 円レンジを見込んでおいても、それほど違和感を覚えないのではなかろうか。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。



FX-newsletter